

平成29年度
統一的な基準による財務書類
ダイジェスト版

鶴ヶ島市の財政状況公表資料

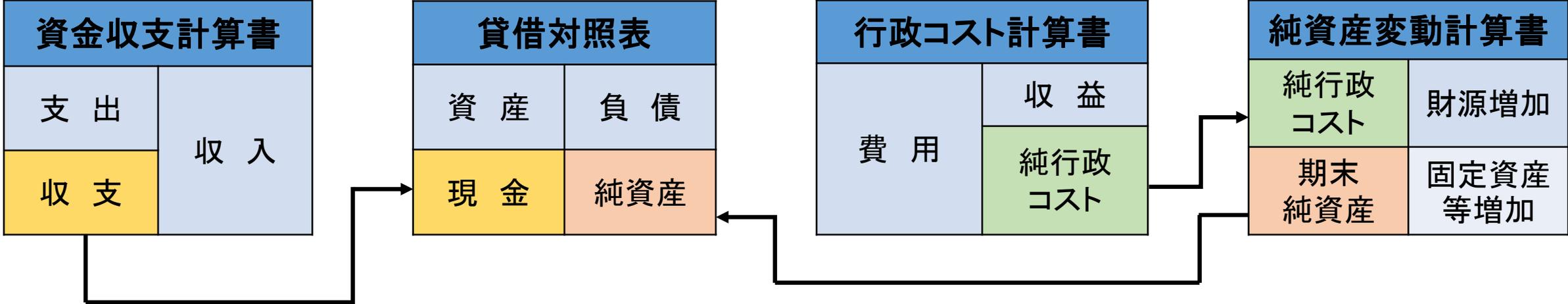
統一的な基準による財務4表

本市では、「統一的な基準」で、全体会計財務書類(貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書、資金収支計算書の4表(平成29年度版))を作成しましたので、お知らせします。

財務4表は相互に関連し、自治体の歳入歳出決算書ではわからない情報を補完しています。

発生主義会計

財務4表の相互関係



収支情報
お金の出入りの情報を3つの活動に分けて把握します。

ストック情報
市が保有する資産や負債などのストック状況を把握します。

コスト情報
1年間の行政活動のうち資産形成以外で発生したコストがわかります。

純資産情報
貸借対照表にある純資産の増減と内訳がわかります。

※次ページ以降の各表の金額については、項目ごとに四捨五入をしているため、合計が一致しない場合があります。

貸借対照表

どのような資産をもっているのか？

資産をどうやって調達したか？

(平成30年3月31日時点)

貸借対照表とは、鶴ヶ島市が市民サービスを提供するためにどれだけ資産を保有しているか、その資産がどのような財源で賄われているかを対照表示した財務書類です。左側の資産合計額と右側の負債及び純資産合計額の左右が一致することから、「バランスシート」とも呼ばれます。

平成29年度に実施した小学校トイレ改修工事など、施設の大規模な修繕は、「資産」として計上されています。

鶴ヶ島市の貸借対照表を一人あたりに換算してみるとこうなります。

資産 96万円	負債 28万円
	純資産 68万円

平成30年3月31日時点
人口: 70,081人

借 方	
資 産(現在保有している資産)	
1、固定資産	634億8千万円
(1)有形固定資産	587億4千万円
①土地	403億5千万円
②立木竹	1千万円
③建物	333億3千万円
④建物減価償却累計額	△198億2千万円
⑤工作物	362億1千万円
⑥工作物減価償却累計額	△314億4千万円
⑦物品	3億2千万円
⑧物品減価償却累計額	△2億2千万円
(2)無形固定資産	1千万円
(3)投資その他の資産	47億3千万円
2、流動資産	39億2千万円
資産合計	674億円

貸 方	
負 債(将来世代の負担)	
1、固定負債	174億4千万円
(1)地方債	158億7千万円
(2)長期未払金	11億7千万円
(3)退職手当引当金	4億円
2、流動負債	20億9千万円
(1)1年内償還予定地方債	16億4千万円
(2)未払金	2億4千万円
(3)賞与等引当金	1億9千万円
(4)預り金	2千万円
負債合計(1+2)	195億3千万円
純資産(現在までの世代が負担)	
1、固定資産等形成分	652億5千万円
2、余剰分(不足分)	△184億円
純資産合計	478億7千万円
負債及び純資産合計	674億円

これまで市が発行した地方債(借金)の元金のうち、翌々年度以降に返済する地方債の合計金額です。

これまで市が発行した地方債(借金)の元金のうち、翌年度に返済する地方債の合計金額です。

年度末に全職員が普通退職した場合の退職手当支給見込額が計上されています。

翌年度に支払うことが予定される期末勤勉手当のうち、当年度の負担相当額が計上されています。

補足:自治体の決算書では、お金の出入りしか把握できませんが、発生主義の考え方では、見えない負債も把握が可能となります。

必ず左右の金額が一致する。

行政コスト計算書

自 平成29年4月 1日
至 平成30年3月31日

行政コスト計算書とは、民間企業会計の損益計算書にあたるもので、福祉サービスやごみ収集のように、行政サービスを行うために、1年間にどこにどれだけの費用がかかっているのか、使用料や手数料などの収益はどのくらいあるのかをみる財務書類です。

この計算書は、資産の増減を伴わない費用と収益を把握します。

当年度に賞与引当金として繰り入れた金額が計上されています。

物件費・維持補修費はここに計上されています。

扶助費はここに計上されています。

①経常行政コスト 1年間の行政活動のうち、資産形成に結びつかない経常的な行政活動にかかる経費。	296億5千万円
1、人にかかるコスト	37億6千万円
職員給与費等	30億5千万円
賞与等引当金繰入額	1億9千万円
その他	5億2千万円
2、物にかかるコスト	56億2千万円
物件費	40億4千万円
維持補修費	3千万円
減価償却費	15億5千万円
3、その他のコスト(地方債の利子など)	3億8千万円
4、移転支出的なコスト	198億9千万円
補助金等	167億4千万円
社会保障給付	29億2千万円
その他	2億3千万円
②経常収益及び臨時収益 行政サービスの利用で市民が負担する使用料及び手数料、資産売却益など。	△66億円
③純行政コスト(①-②)	289億9千万円

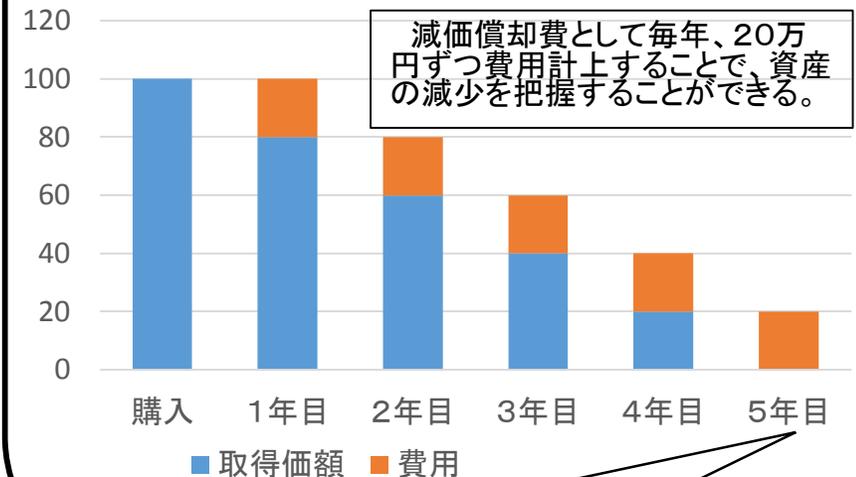
解説

減価償却費について...

減価償却費とは、建物や道路などの資産は、取得時に一時の費用とはせず、その使用可能期間に渡って費用配分したものです。例えば、図のとおり、100万円で購入したものの耐用年数が5年とします。この時、1年間で減少する価値は、 $100万円 \div 5年 = 20万円$ で、これを減価償却費として毎年、行政コスト計算書に計上します。減価償却を行うことで、例えば、3年目にはすり減った部分を控除した残りの部分(40万円)が貸借対照表に資産として計上されることとなります。

各資産ごとの減価償却費をみることで、今後の施設の老朽化度、維持管理、更新費用、更新時期の把握など公共施設マネジメントを進める上での基礎情報となります。

各年度の費用として配分(減価償却費)



耐用年数が過ぎた建物は残存価額が0円となる。

純資産変動計算書

自 平成29年4月 1日
至 平成30年3月31日

純資産変動計算書とは、貸借対照表の純資産の部に計上されている各数値が1年間でどのように変動したかを表している計算書です。

平成28年度末純資産残高	478億円
純行政コスト	△289億9千万円
税込等	272億8千万円
国県等補助金	17億5千万円
無償所管換等	3千万円
平成29年度末純資産残高	478億7千万円

行政コスト計算書で算出した純行政コストがここでマイナス計上されます。

地方税(税込)は、行政コスト計算書上の収益ではなく、市民からの拠出(出資)として捉えるため、純資産変動計算書に計上します。

貸借対照表の純資産と一致します。

資金収支計算書

自 平成29年4月 1日
至 平成30年3月31日

資金収支計算書とは、企業会計のキャッシュフロー計算書にあたるもので、現金預金の出入り情報を、3つの活動に分類して表示する計算書です。

1、業務活動収支(日常的な行政サービスに対するお金の出入り)	
業務活動収支(A)	13億3千万円
2、投資活動収支(公共施設等整備、基金の積み立てなどに対するお金の出入り)	
投資活動収支(B)	△3億4千万円
3、財務活動収支(地方債の返済や借り入れなどに対するお金の出入り)	
財務活動収支(C)	△4億2千万円
本年度資金収支額(A+B+C)	5億7千万円
前年度末現金預金残高	13億5千万円
本年度末現金預金残高	19億5千万円

補足: 現行の決算書の歳入歳出を3つの活動ごとに表示することで、自治体の資金が前年度末残高から本年度末残高へ増減した要因が明らかになるのが特徴です。

年度末の資金残高。貸借対照表の【資産の部】の現金預金と一致します。

※歳計外現金の増減控除後数値